

多くの学校が参加する展覧会などでは、学校による色彩の違いが見られることがあります。毎日生活する学校の環境が作品に反映されるのでしょうか。啓明学園の作品は小学生のものでも、どちらかというと落ち着いて、微妙な色合いがあり、華やかな色の多い会場の中では、遠くからでもそれと分かるほどです。東京にありながら自然に恵まれ、四季の細やかな色の移ろいを見ながら生活できることのありがたさを感じます。

先日、中3の生徒たちと岩手県雫石に体験学習に行きました。生きる基本となる食や環境の問題をしっかりと理解するには、教室での知識だけでは不十分で、農業や林業の仕事を体験し、それに携わる人たちから直接話を聞くことには大きな意味があります。生徒たちは、雫石の豊かな環境が教えてくれるものをしっかりと感じ取る感性を見せてくれました。これも、毎日の生活の中で培われて来たものだと思います。

雫石町とは17年の間お付き合いをしています。あたたかく、おらかな岩手の人たちと啓明の生徒たちとは、どこか響き合うところがあるのかもしれない。

◆ 潜在的カリキュラム

学校では、子どもたちに学ばせたいことを盛り込んだカリキュラムを編成します。それに基づいて授業や学校行事が行われますが、子どもは、学校の自然環境、人間関係、生活の様子などのすべてから影響を受けながら成長していくので、文字では書かれていなくても、あたかもカリキュラムに定められているかのように、いつの間にか身につけていくものがあります。これが「潜在的カリキュラム」と呼ばれるものです。

「潜在的カリキュラム」によって子どもが学習することは、必ずしも大人が望むことではない場合もありますが、一方で、それによって助けられることも少なくありません。

例えば、外国から編入してきたばかりの生徒に、口にすることもはばかれるような悪い言葉を、授業で教えることはまずありません。しかし、それを知らないことは、その文化の中で生活する上で、かなり大きなハンディキャップを負うことになります。ほんとうは「悪い言葉」も学習させたいのですが、それを公式の書かれたカリキュラムに盛り込むことは無理があります。



ところが、不思議なことに、たいていの場合、子どもたちは比較的短い間に悪い言葉を学習してしまいます。遊びの中で友だちが使っているのを聞いたり、友だちにおもしろがって言わせられたりする経験をとおして身につけるのでしょうか。潜在的カリキュラムによって子どもが学習する好例です。

こうなれば、大人は「そんな言葉を使ってははいけません。」と言っていればいいのです。

◆ 家族も環境で育つ

私事です、私たちは結婚してすぐにドイツに住みましたが、ドイツ人の仕事観、家庭観に大きな影響を受けました。お父さんが仕事帰りに赤い買い物袋をもって野菜を買っている姿などを見て暮らしたことは、我が家のその後にたいへんよい影響を与えてくれたと思います。毎週1回レースのカーテンを洗濯するという習慣までは、つきませんでした。

海外に住んでいると、家庭の在り方についても、父親と母親の教育へのかかわり方、家事の分担の仕方など、日本とはちがう発想に出会うことが多々あります。家族がよいと思えば、それを家庭の文化とすることができますし、日本の多くの家族が悩んでいる問題の解決につながる糸口を見つけることもあるかもしれません。

海外生活の経験を人生に生かすことができるのは、子どもだけではないのです。

啓明学園 初等学校・中学校・高等学校
国際教育センター

〒196-0002 東京都昭島市拝島町 5-11-15

TEL : 042-541-1003

HP : www.keimei.ac.jp E-mail : kokusai_info@keimei.ac.jp



子どもは、学校だけではなく、家庭や社会という環境の中で、意識・無意識に多くのものを学んでいく。また、海外では、大人も新しい環境での経験を通して、さらに多くを学んでいくという、佐々先生のお話に、心から賛成です。

渡米直後のABCも分からない子どもが現地校へ通うだけで、大人以上の早さで適応していく姿を見ると、環境の力は明白です。